

前「読み」に関する早期療育

—ダウン症乳幼児の能力開発プログラム—

白幡久美子

1. ダウン症乳幼児に対する前「読み」指導の重要性

1984年以来、幼児の能力開発について検討し続けている。その際、とりわけ大切なのは、ハンディキャップを負った子ども達の教育方法である。健常児が教育の方法いかんではその子供の持っている能力をじゅうぶん発揮し飛躍的に発展しうると同じように、ハンディキャップを負った子どもでも教育のしかたひとつでその能力をのばすことができるはずである。

1986年度、1988年度の2度にわたり文部省科学研究費奨励研究の適用を受け、両親が主体となって実践する早期療育プログラムを運動面（独歩まで）と認知面について検討してきた。また、現在、日本ポーター協会岐阜支部の会員とその子ども10組に実践指導を行っている。

運動面のプログラムとその実践成果はすでに発表した¹⁾。そこで本稿では、認知面のプログラムの一部である前「読み」指導について検討したい。

前「読み」の範囲として、子どもが絵本の内容を理解することと、単なる記号としての仮名を記憶することを考えている。絵本の読み聞かせは、場面想定や状況把握さらに言語数を豊富にするのに大いに役立つ。このことは、「クシュラの奇跡²⁾」や「奇跡の子ドーラン³⁾」の記述でも立証されている。

また、仮名を覚えることは、就学の準備としてばかりではなく、それ以上に音節を理解す

るのに役立つ。ダウン症幼児の場合、言語を発音する際に音節の一部が欠落することが多い。たとえば、「りんご」を「ご」と言ったり、「バナナ」を「ナ」あるいは「バーナ」と言ったりする。このようなことを少しでも解消するために、ひとつのことばがいくつの音節から成り立つかを、仮名で示すことで正しい発音の一助としたい。

さらに仮名を認知することは子どもの視野を広げることにもなる。幼児期は拾い読みで十分であるが、絵本の中の仮名あるいは新聞や雑誌の中の仮名をみつけて発音できるようになれば就学後の負担も軽減される。それも綿密に計画を立て、数年を費して築き上げていかなければ子どもの知識として定着しない。

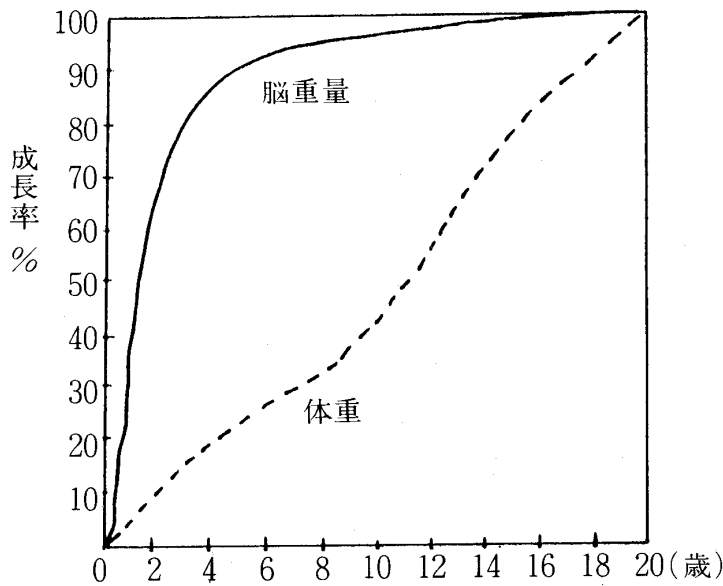
正しい教え方を用い、指導を怠りさえしなければ、ダウン症児は着実に知識を獲得する能力を持っている。

2. 認知面における飛躍的な伸びの可能性

知能が発達するということは、すでにいくつかの文献⁴⁾で指摘されている。つまり知能は教育によって伸ばすことが可能なのである。しかも、乳幼児期がその鍵を握っている。

図 脳重量と体重の発達比較⁵⁾

(R.E.Scammon による)



上図からわかるように、脳重量の成長率は0～2歳までがもっとも著しく、2歳までに70%、5・6歳までに90%、10歳までには95%以上にも及ぶ。したがって、脳重量の成長率の著しい時期に適切な教育を行うことにより、知能を加速的に伸ばすことが可能となる。このことは、ハンディキャップを負った子どもにも同様にあてはまるはずである。いかに重いハンディキャップを負っていても、どの子どもも身体的成長があるように、知的発達の可能性をも有するのである。とりわけダウン症乳幼児には、特異な成長過程は認められない。健常児の成長に順じている。だから、認知面についても運動面と同様に⁶⁾正しい指導と濃密な刺激が与えられることにより、十分発達させることができる。しかも、より発達を促すには、できるだけ早期から指導を行う方がよいことが上図からも歴然としている。

生後5・6歳までは、ダウン症児とその両親にとっては、もっとも多くの問題点をかかえている時期でもある。第一に、障害を持っているわが子を受けとめることができるかどうかということ、次に、いかに早く親が立ち直り、子どもの保護養育に専念できるかという問題点である。第三に、子どもの健康状態の良し悪しも問題点として挙げることができる。

早期療育にいかにも熱心であっても、子どもの

身体の状態を無視して療育を行うことはできない。ダウン症乳幼児は、一般的に健常児よりずっと抵抗力がないし、先天的な疾患を有している場合も多いので、医療機関にたよらざるをえないことが多数ある。とりわけ、心臓疾患を有するダウン症児の数は多く、その手術も早期に行うことが望ましいと言われる。そのような場合は、医学的治療を優先させねばならないからである。

3. 本プログラムの特長

これまで述べてきたように、ダウン症児の場合、適切な指導により大いにその発達が期待されている。しかし、それを阻むいくつかの要因がある。

- a 子どもの身体的問題
- b 親の意識の問題
- c 地域上の問題

aとしては前述のように子供の病気に関すること、bとしては子どもを育てていくことについての両親の不安、諦め、悩み等が挙げられる。cとしては、地域に適切な療育機関がないとか近隣の人々が障害児に対し差別をするということが挙げられる。

これらの子どもの発達を阻む要因をできるだけ取り除くことができるように、本プログラムは、家庭の中で、両親が教師となってわが子の療育にとりくむ形式をとるようにした。そして、次の点を考慮して作成した。

- ① 大課題⁷⁾は「ポータルプログラム」の課題記述に順じたこと。そして、親が子どもの発達を実感できるように小課題を設定し、一項目ごとに到達年月齢を記入できるようにしたこと。
- ② 大課題と小課題は子どもの行動目標の形式で記述したこと。
- ③ 小課題の達成を促進するために働きかけることを細部にわたり記述したこと。
- ④ 使用教材を具体的に示したこと。
- ⑤ ある課題を獲得したら、つぎにどの課題にとり組めばよいかを順序立てて示したこ


と。

- ⑥ できるだけ平易な表現で記述し、だれもが本プログラムを実施できるようにしたこと。
- ⑦ 絵カードは、「公文式大判漢字カード」全90枚、「七田式絵カード」全90枚を利用するか、安藤忠氏の掲げる「百語リスト⁸⁾」を利用して絵カードを作成しそれを用いること。
- ⑧ 絵本はできるだけ多くリストアップし、はば広く数多く読みきかせてやることにより、子どもの世界を広げてあげることができるようにしたこと。
- ⑨ 子どもは身近にあるものを題材にした絵本に興味を示すから、年月齢に特にこだわらずに絵本を選んだこと。
- ⑩ 本プログラムを実践する両親のために [年月齢別絵本一覧表] をプログラムのおわりに添えたこと。

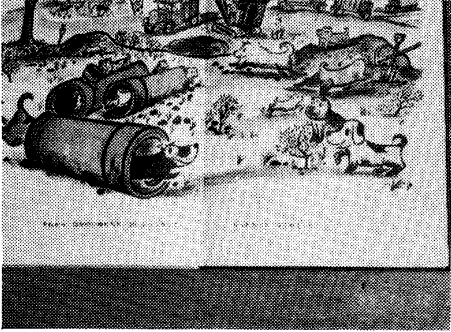
これらの配慮により、たとえ子どもが入院していても親が時間を見計らってプログラムを実施することができるはずである。また、居住地に療育機関がなくとも、親自身が主体的にプログラムを実施することができるはずである。


地域ケアが十分整っているようなめぐまれた場所は、全国的にみればごくわずかである⁹⁾。また、子どもも健康的にめぐまれ、遠隔地の療育機関まで連れ出すことができるとは限らない。むしろダウン症児の場合は身体的にも乳幼児期には健常児より多くの問題をかかえている¹⁰⁾。乳幼児期の子どもの成長発達の鍵は、古くから言われているように¹¹⁾、まさに親が握っているのである。また、1日24時間中子どもの様子を把握して刺激を与えることができるのは両親しかいないのである。

4. 前「読み」指導プログラム

大 課題	小 課題	達 成 年月齢 (歳：ヶ月)	課題達成のために働きかけること
絵カード4枚のうちもの名を言われるとそれをとる (5～12ヶ月)	① 1・2文字からなるものの絵カード4枚を1枚ずつ見せて(10秒間位), そのものの名を言ってもらおうと注視する。 ② 絵カード2枚のうち一方の名を言うと, その絵カードをとる。 ③ 絵カード4枚のうち1つのものの名を言われるとそれを捜しだして手をのせる。 ④ 絵カード4枚のうち1つのものの名を言われるとその絵カードをとることができ, それを箱の中に入れる。	: : : :	(ア) 子供の身近にあるものや動くものを選ぶ。 例) 猫, 犬, 葉, 手, 足 (イ) 全く異なる種類のものので, 対をつくる。 (犬-手, 猫-葉, 車-足) (ウ) はじめは, 子どもの手をもってとらせる。 (エ) 必ず正解のカードをとれるように補助する。 例) 誤ったカードをとろうとしたらそのカードをおさえる。正しいカードを指さしする。
絵本を読んでもらうと最後まで注視している (3～12ヶ月)	① 短い絵本を注視する。  ② 1日3～5冊の絵本をきげんよく読んでもらう。	: :	(ア) 単純な絵の本, 語りの少ない本を選ぶ。 例) 絵本リストより 『いいおかお』 『いないいないばあ』 『こいぬのくんくん』等 (イ) 時間帯を決めて, 1日のうちの絵本読みの時間を確保する。 例) ・目覚めたとき・食後・就寝前等

	③ 3冊の絵本の中から1冊選んで読んでもらう。	:	(ウ) 毎日読んでいる絵本を3冊持ってそのうち1冊を指さしさせる。 (エ) 1冊選ばせたら他の2冊を子どもの視野からはずす。 (オ) 1冊の絵本を最後まで読みきる。
絵カード90枚をとることができる(1〜2歳)	① 絵カード10枚をとることができる。	:	(ア) 絵カードは約10cm四方あるいはB6版くらいの大きさのものにする。 ・市販のカードの利用(公文, 七田) ・手作りカード
	② 絵カード20枚をとることができる。	:	(イ) 子どもが発声しやすく, 生活に身近なことばを選ぶ。 例) はっぱ, パン, ラッパ, ねこ
	③ 絵カード50枚をとることができる。	:	(ウ) 絵カードを毎日2枚ずつふやしてカルタとりをさせる。ただし, 50枚とれるようになったら, 以後は4・5枚ずつ増していくようにする。
	④ 絵カード70枚をとることができる。	:	(エ) 30枚以上とれるようになったら, 時間を分けてカルタとりをした方がよい。
	⑤ 絵カード90枚をとることができる。	:	(オ) 子どもに強要して興味を減ずることのないように, カルタあそびとして親もいっしょに楽しむ。
絵本を子ども自身も読んでもらう(1〜2歳)	① 「はい, 次の頁ね」と言われると絵本の頁をめくる。	:	(ア) 子どもの親の右手の上から右手をかぶせいっしょに頁をめくる。 (イ) 1頁ずつ半ばおくっておく。 (ウ) 指示と同時に子どもの手にふれてあげる。
	② 気に入った絵本は必要な時に頁をめくることができる。	:	(エ) 頁をめくる時になってもじっとしていたら少し待つ。 (オ) 2才までに20冊以上の絵本を読んであげる。

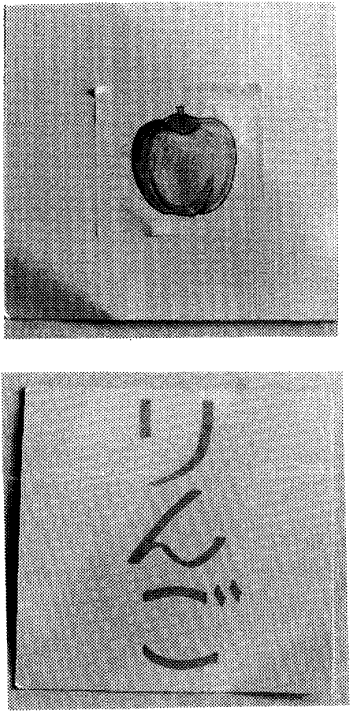
<p>絵や写真の中から言われたものを指さす（1～2歳）</p>	<p>① 単純な絵本の中で「～はどこ」と聞くと、それを指さす。</p>  <p>② 3・4人の写っている写真の中で家族を見つける。</p>	<p>:</p> <p>:</p>	<p>(ア) 指さしをいっしょにしてあげる。また子どもができないときは、親が示してやる。 例)「どろんこハリー」の絵本で「ハリーはどこ?」 「そう、ハリーいましたね」</p> <p>(イ) 正しいものを指さしたら必ずほめる。</p> <p>(ウ) 子どもがみつけやすい色や形のものから指さしをさせる。</p> <p>(エ) 子どもが大好きな人についてたずねる。 例)「おかあさんはどこ?」</p> <p>(オ) 見知らぬ人ばかりの中に家族が1人写っている写真を選ぶ。</p> <p>(カ) 指さしたときに「そうね、おかあさんね」とことばかけしてあげる。</p>
<p>言われると特定の本を捜し出す（2～3歳）</p>	<p>① 「本を読んであげるから持って来て」と言うと、本棚から選んで本を持って来る。</p> <p>② 「〇〇ちゃんの大好きな本を持って来て」と言うと本棚から選択して自分の好きな本を持って来る。</p> <p>③ 「～の絵本を持って来て」と言うと本を捜し出して持って来る。</p>	<p>:</p> <p>:</p> <p>:</p>	<p>(ア) 子どもの好きな絵本をとりやすい位置においておく。</p> <p>(イ) 子どもが途中で用件を忘れて他の遊びに移ってしまった場合は、もう1度声をかけて持って来るようにしむける。</p> <p>(ウ) 絵本用の本棚は特定の場所にする。</p> <p>(エ) 絵本の数を5・6冊に限定しておく。</p> <p>(オ) 子どもがお気に入りの絵本の名を挙げる。</p> <p>(カ) はじめは数冊の中から選ばせ、徐々に並べる本の数を増していく。</p>

<p>絵本の中で身近な物の名を4つ言う (2〜3歳)</p>	<p>① 絵本を開き、「これなあに」と質問し、答も言ってあげると口形をまねる。</p> <p>② 動植物や日用品の名称を4つずつ言える。</p>	<p>:</p> <p>:</p>	<p>(ア) まねやすく、音節の少ない言葉からはじめる。 例) 手, 目, 耳, 足, 鼻, はっぱ</p> <p>(イ) 親の口を注視させる。</p> <p>(ウ) 日常生活においてよく使用するもの、よく見るものを選択する。 例) 動植物—犬, 猫, 鳩, うさぎ, 花, 鳥, 日用品—鍋, ほうき, アイロン, ベット</p> <p>(エ) 擬声語, 擬態語で答えてもほめてあげる。</p>
<p>絵本の中であらわしている動作を言う (2〜3歳)</p>	<p>① 「赤ずきん」の中の1こまを用いて、「おばあちゃん, なにしているの」と質問すると、「ねんねしている」と答える。</p> <p>② 数冊の絵本の中で同じ動作をしている部分の質問に対しては同じ動作ことばで答える。</p>	<p>:</p> <p>:</p>	<p>(ア) 答えられないときは、答を言ってあげてをくり返す。</p> <p>(イ) 1週間ずつ毎日同じ本を読んで同じ質問をする。但し、1冊に限る。</p> <p>(ウ) 絵本を読む中で課題を出す。</p> <p>(エ) 不完全な答の時は補う。 例) 「ねんね」→「ねんねしているねエ」, 「あんよ」→「あんよしている」</p>
<p>ひらがなカードをみてこたえる (2〜3歳)</p>	<p>① ひらがなカードをみながら親が発音すると発声の口形をまねる。</p> <p>② 4枚のひらがなカードから「の」を選ぶ。</p> <p>③ 「ひらがな表」をみて「の」を指さす。</p> 	<p>:</p> <p>:</p> <p>:</p>	<p>(ア) できるだけ単純な文字からみせる。 例) 「の」, 「し」, 「て」, 「い」, 「り」</p> <p>(イ) 発声を強要しない。</p> <p>(ウ) 「の」のカードを子どものもっともみやすい位置におく。</p> <p>(エ) 「の」のカードだけ子どもに近づけて置く。</p> <p>(オ) 「ひらがな表」をみせて「の」はどこ」ときき、指さしできなければ子どもの指を持っていっしょに指さしする。</p>

	<p>④ 「ひながな表」やひらがなカードの「の」をみて発音できる。</p> <p>⑤ 「ひらがな表」をみて半分くらい指さしして発音する。</p>	<p>：</p> <p>：</p>	<p>(カ) 口形を十分みせる。</p> <p>(キ) 覚えやすいひらがなから指さしと同時に発声を促す。</p>
<p>絵カードをみてそのものの名前を言うことができる (2〜3歳)</p>	<p>① 1音節, 2音節の単語を絵カードをみて発音できる。</p> <p>② 3音節以上の単語で, 生活に身近なものの名称を言える。</p> <p>③ 100種くらいのもの名称を言うことができる。</p>	<p>：</p> <p>：</p> <p>：</p>	<p>(ア) 幼児語, 擬声語, 擬態語を使用しないで話しかける。 例) パン, パパ, ママ, 本, 靴, 梨, 柿</p> <p>(イ) 欠落する音節があってもよい。 例) バナナ→バーナ, みかん→み, アイス→ス, りんご→〜ご, 電話→〜わ, テレビ→〜ビ, トマト→〜ト, ひこうき→〜き</p> <p>(ウ) 子どもの目線にあわせて口形を注視させる。 (エ) 発音できたときは不完全でも必ずほめる。</p>
<p>絵本の内容について話す (3〜4歳)</p>	<p>① 絵本の中のでき事を2つ言える。</p>	<p>：</p>	<p>(ア) 内容の単純な絵本を読んで, 質問に答えることができるようにする。はじめは絵をヒントとして示してあげてから答えさせる。 例) 『もしもしおでんわ』 「おでんわしたのはだれ?」 →「あひる」 「あとだれがおでんわしたの?」 →「おひさま」</p>

<p>絵本の内容について話す(3、4歳)</p>	<p>② ひとりで絵本をみながら、読む。</p> <p>③ 絵本をみながら、内容を話す。</p>	<p>:</p> <p>:</p>	<p>(イ) 質問に対し、二語文以上でこたえることができる。 例)『のせてのせて』 「くまさん、どうしたの?」 →「のせてのせてって乗ったの」 「(トンネルの頁で)ここはどこ?」 →「トンネル、まっくら」</p> <p>(ア) 子どもに絵本をわたして、「お母さんにこの本読んで」と言って読ませる。 *) 頁をめくりながら発語するだけでよい。 (イ) 絵本をみながら、ところどころ子どもに読ませる。 *) 1頁ずつ交替で読んだり、次頁をあけて内容を説明させたりする。</p> <p>(ア) かんたんな言葉での説明を促す。 例)『ももたろう』 「ももたろうはどこから生まれたの?」 →「ももからきたの」 「ももたろうは何しに行ったの?」 →「(「おにたいじ」) 「おに、えいっ、やあって(するためにももたろうが)行った」 (イ) 「どんなお話」ときき、頁をめくりながら話させる。</p>
<p>ひらがなを五文字以上読む(3、4歳)</p>	<p>① 一筆のひらがなを絵カードでみせる。し、の、ん、く、つ、て(ひ、へ、る、ろ)それから『「のり」の「の」ね!』 「の」 のように子どもに発音させる。</p> <p>② 子ども自身の名前をひらがなで読むことができる。</p>	<p>:</p> <p>:</p>	<p>(ア) 発音しやすいひらがなを1枚から練習する。 例)「の」—— ・次に、手を出して「て」のカードをみせると、実物とマッチしてよい。 (イ) 子どもがよく発音している文字から覚えさせる。 (ウ) 名前を言いながら、そのひらがなをポインティングしてあげる。 (エ) 名前を読みながら、字を指さしさせる。</p>

	③ 新聞や雑誌で読めるひらがなをみつけて、声を出す。	:	(オ) 発音をまねさせる。 (カ) 「〇〇ちゃん」と言ったら「はい」と手をあげさせる。 (キ) 新聞をみているとき、見出しの中から「の」をみつけて、「の」といって子どもにきかせる。 (ク) 新聞の中の文字を指さしして「これなあに」ときき、答えさせる。
物語をきいて、でき事を言う(4〜5歳)	① 絵本を読んでもらってから、その中の出来事を5つ思い出して言う。 ② 物語を聞いて、出来事を5つ思い出して言う。	:	(ア) 短いくり返しの多い語を含む絵本、例えば『大きなかぶ』、『のせてのせて』を選んで話す。 (イ) 絵本読みを3回してからきく。すぐ答えられない時は、あてはまる頁をひらいてあげる。 (ウ) 語りきかせを3回くらいくり返して行い、その中ででき事を言わせる。その際選ぶ話は、絵本でも度々読んであげているものにする。 (エ) 答えられない時は、話の順序を追って思い出させていく。
平仮名五十音を読む(4〜5歳)	③ ひらがな表をみてその中の20文字を読む。	:	(オ) 絵のかいてあるひらがな表を家の中にはりつける。子どもの目の位置にあわせる。 (カ) 指さしして読めないときは、絵の方をみせて、「これなあに」と言ってあげる。 例) 「これなあに？」 「あひる」 『そう、あひるの「あ」ね』 (キ) 絵カードで絵とひらがなを照合させていく。 例) 「(絵をみせて) これなあに？」 → 「ねこ」 「当り! (裏をみせ) ねこ」

	<p>④ ひらがな表をみて五十音を順に言う。</p>	<p>:</p>	<p>(ク) 文字を指さし(親子いっしょに)しながら読ませる。明確な発音でなくともよい。</p> <p>(ク) 読めないときは、絵の名前を言わせてから、文字を読ませる。</p> <p>例) 「(絵をさして) これなあに？」 → 「かえる」 『そう、かえるの「か」』 → 「か」</p>
<p>ひらがなとかたかなを照合して読める(5〜6歳)</p>	<p>① かたかなの五十音を読むことができる。</p> <p>② ひらがなの文字の上にかたかなの文字をのせる。</p> <p><手作り絵カードの例></p> 	<p>:</p> <p>:</p>	<p>(ア) かたかな表を用いてひらがなと同じ形式で文字をみて発音させる。絵も同じものを使う。</p> <p>(イ) 絵カードでものの名称を言ってからかたかなでもう1度ゆっくり指さしながら読ませる。あるいはいっしょに読む。</p> <p>(ウ) はじめは、ア行のみを照合できるようにする。</p> <p>(エ) ア行が完全にできるようになったら、カ行サ行と順にふやしていく。</p> <p>(オ) 数枚の任意のひらがなカードをならべてその上にかたかなカードを置かせる。</p>

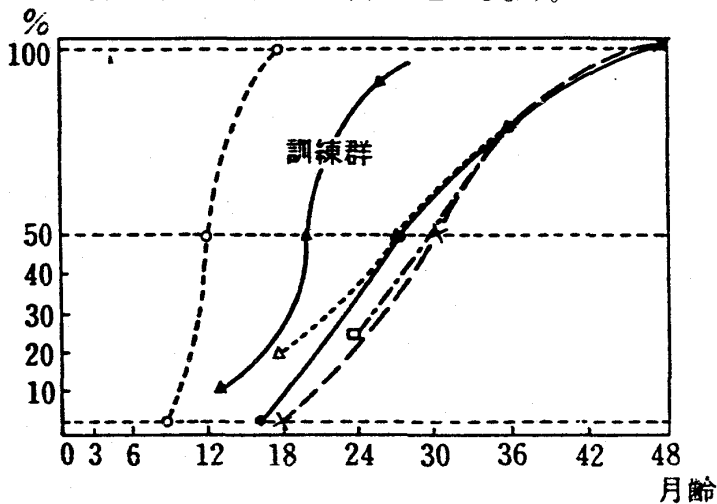
〔年月齢別絵本一覧表〕

年月齢	No.	著者名	書名	出版社
三 カ 月 か ら	1	ディック・ブルーナ	「字のない絵本」シリーズ	福音館
	2	E.H.ミナリック	「こぐまのくまくん」	〃
	3	ディック・ブルーナ	「こいぬのくんくん」	〃
	4	高橋 宏幸	「だいすきなママ」	岩崎書店
	5	松谷みよ子	「いいおかお」	童心社
	6	〃	「いないいないばあ」	〃
	7	〃	「もしもしおでんわ」	〃
	8	〃	「おふろでちゃぶちゃぶ」	〃
	9	〃	「のせてのせて」	〃
	10	ディック・ブルーナ	「うきこちゃんとうどうぶつえん」	福音館
	11	石井 桃子	「ちいさなねこ」	〃
一 歳 か ら	12	マーサ・メイヤー	「やあ かえるくん」	福音館
	13	ジーン・ジオン	「どろんこハリー」	〃
	14	神沢 利子	「あひるのバーバちゃん」シリーズ	〃
	15	長野 博一	「ひとつ たくさん」	福音館
	16	ポール・ガルトン	「三びきのくま」	ほるぷ
	17	多田ヒロシ	「なにしてる なにしてる」	こぐま社
	18	イヴ・スパンク・オルセン	「つきのぼうや」	〃
	19	谷川俊太郎	「あたしのあ あなたのあ」	太郎次郎社
	20	安野 光雄	「もりのえほん」	福音館
	21	水原 源城	「けんか」	〃
	22	村山 桂子	「ひつじのむくむく」	〃
	23	岩村 和朗	「りんごがひとつ」	銀河社
	二 歳 か ら	24	岸田 衿子	「かばくん」
25		内田莉莎子再話	「おおきなかぶ」	〃
26		ウクライナ民話	「てぶくろ」	〃
27		岩崎ちひろ	「あめのひのおるすばん」	至光社
		〃	「ことりのくるひ」	〃
28		グリム童話	「おおかみと七ひきのこやぎ」	福音館
29		ルース・クラウド	「はなをくんくん」	〃
30		バージニア・リー・パートン	「いたずらきかんしゃちゅうちゅう」	〃
31		岸田 衿子	「なにをたべてきたの」	偕成社
32		レオ・レオーニ	「あおくときいろちゃん」	至光社
33		西巻かや子	「わたしのワンピース」	こぐま社
34		北欧民話	「三びきのやぎのガラガラドン」	福音館
35		かこさとし	「ことばのべんきょう」	〃
36		うちだりさこ	「しずくとりんご」	〃
37		なかえよしを	「ねずみくんのチョッキ」	ポプラ社
38		赤羽 末吉	「おおきなおきなおいも」	福音館
39		蔵富千鶴子	「どんくまさんのぼん」	至光社
三 歳 か ら	40	筒井 頼子	「おでかけのまえに」	福音館
	41	久保 喬	「もしもし おかあさん」	金の星社
	42	レオ・レオーニ	「さかなはさかな」	福音館
	43	西内みなみ	「ぐるんぱのようちえん」	〃
	44	神沢 利子	「ぼとんぼとんはなんのおと」	〃

年月令	No.	著者名	書名	出版社
四 歳 か ら	45	林 明子	「はじめてのおつかい」	福 音 館
	46	石井 桃子	「いっすんぼうし」	〃
	47	中川李枝子	「ぐりとぐら」	〃
	48	村山 桂子	「たろうのおでかけ」	〃
	49	松井 直 再話	「だいくとおにろく」	〃
	50	山下 明生	「てがみをください」	文 研 出 版
	51	かこさとし	「からすのパンやさん」	偕 成 社
	52	谷川俊太郎	「あな」	福 音 館
	53	レオ・レオーニ	「スイミー」	〃
	54	マンロー・リーフ	「はなのすきなうし」	岩 波 書 店
	55	ガス・ウィリアムス	「しろいうさぎとくろいうさぎ」	福 音 館
	56	メアリ・チャルマーズ	「おとうさんねこのおくりもの」	〃
	57	安野 光雄	「かぞえてみよう」	講 談 社
	58	グリム	「ブレーメンのおんがくたい」	福 音 館
	59	ビル・ピートン	「イーライじいさんのすてきなともだち」	偕 成 社
	60	M.H.エッツ	「わたしとあそんで」	福 音 館
	61	エドアルド・ペチシカ	「りんごのき」	〃
	62	中川李枝子	「そらいろのたね」	〃
	63	イギリス昔話	「三びきのこぶた」	〃
	64	時田 史郎 再話	「うらしまたろう」	〃
	65	安野 光雄	「あいうえおの本」	〃
	66	加古 里子	「だるまちゃんとうさぎちゃん」	〃
	67	松井 直	「ももたろう」	〃
	68	松井 直	「こぶじいさま」	〃
	69	村山 桂子	「たろうのおでかけ」	〃
	70	谷川俊太郎	「よるのびょういん」	〃
	71	佐々木たづ	「子うさぎましろの話」	ポ プ ラ 社
	72	エゴン・マチーセン	「ひとりぼっちのこねずみ」	福 音 館
73	西巻かやこ	「はるかぜさんといっしょに」	こ ぐ ま 社	
74	新美 南吉	「手ぶくろを買いに」	偕 成 社	
75	ラッセル・ホーバン	「おやすみなさいフランシス」	福 音 館	
76	ハンス・フィッシャー	「長ぐつをはいたねこ」	〃	
77	ロバート・マックロフスキー	「かもさんおとおり」	〃	
78	松野 正子	「こぎつねコンとこだぬきポン」	童 心 社	
79	斉藤 隆介	「モチモチの木」	岩 崎 書 店	
80	岩崎 京子	「かさこじぞう」	ポ プ ラ 社	
81	グリム童話	「うできき四人きょうだい」	福 音 館	
82	グリム童話	「くまおとこ」	福 武 書 店	
83	灰谷健次郎	「ろくべえまってるよ」	文 研 出 版	
84	アーノルド・ローベル	「ふたりはきょうも」	文 化 出 版	
85	赤座 憲久	「バイオリンの村」	小 峰 書 店	
86	ラッセル・ホーバン	「ジャムつきパンとフランシス」	偕 成 社	
87	阿川 弘之	「きかんしゃやえもん」	岩 波 書 店	
88	松谷みよ子	「やまんばのにしき」	ポ プ ラ 社	

【註】

- 1) 「ワシントン大学プログラム」と「ポーター・プログラム」(第一報): 東海女子大学紀要第8号 P.171~182, 同(第二報): 東海女子大学紀要第9号 P.113~126参照。
- 2) ドロシー・バトラー『クシュラの奇跡』のら書店。
- 3) リンダ・スコットソン『奇跡の子ドーラン』偕成社。
- 4) 時実利彦『脳を育てる』三笠書房。
上田・伊藤隆二『知能』
滝沢武久『知能指数』
拙著『『能力開発』に関する比較研究(I)』東海女子短期大学紀要12号 P.115~127参照。
- 5) 清水驍・千葉晃『知能教育の理論と実際』
知能教育開発センター P.20。
- 6) 前掲書(第二報)参照。
安藤忠, 前掲書 P.49 図II-2-6より。



- 健常児 (Neligan and Prudham, 1969)
- ダウン症 (Penrose and Smith, 1966)
- ×---× ダウン症 (Hall, 1970)
- ダウン症 (Carr, 1970a)
- △---△ ダウン症 (Centerwall and Centerwall, 1960)

ダウン症児の始歩年齢 (Griffith より引用)

図II-2-6 独歩開始時期の比較

- 7) 前掲書(第一報) P.179参照。
- 8) 安藤忠, 前掲書 P.266~267
- 9) 日本精神薄弱者福祉連盟『精神薄弱者問題白書』
日本文化科学社(1985) P.14~15, P.248
- 10) 塩野寛・門脇純一『ダウン症候群』
南江堂 P.26~27 安藤忠前掲書 P.63~95。
- 11) コメンスキー『母親教育指針』玉川大学出版
ザルツマン『かへの本』あすなろ書房
鈴木鎮一『愛に生きる』講談社